



現代学生論（特集 青少年問題）

岩崎, 信彦

(Citation)

社会学雑誌, 1:162-172

(Issue Date)

1984-03-01

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCOI)

<https://doi.org/10.24546/81010708>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81010708>



現代学生論

岩 崎 信 彦

一 「大学紛争」の意味

一九六八年から七〇年にかけて全国の学園を席捲した「大学紛争」から早や一〇年余の歳月が流れた。あの「大学紛争」は何であったのかは、こんにちの大学生を考えるうえでやはり避けて通ることができないものである。

当時の大学生は、敗戦直後のどさくさが一段落した一九五〇年前後に生まれた「団塊の世代」に属していた。かれらは戦後の民主主義制度の恩恵に浴して成長し、小学生の頃には家庭電化製品、テレビなど「ゆたかな生活」をすでに享受できるようになっていた。と同時に、学歴をめぐる受験競争の度はしだいに激しさを増し、「灰色の青春」を送ることを余儀なくされていた。このような背景には、かれらを一方で「大量消費者」として、他方で「人的資源」として育成しているこうとする日本経済の「高度成長」政策があったのである。

この間、大学も大きな変貌をみせた。大学の増設と進学

率の急増、そして大学間の格差づけの進行。それは、経営エリート、高級技術者、さらに、技能労働者、事務、販売労働者などを多層的に供給するための教育システム化であった。一方で私学におけるマスプロ化の進行、他方で「象牙の塔」とされてきた国立大学における広い意味での産学協同化がその具体的なすがたであった。このようななかで、学生の意欲減退——無気力、無関心、無責任など——が指摘されはじめ、たとえば、「広島大学保健管理センターが過去十九年間の広島大学における休学者の実態調査をおこなったその結果資料によれば、昭和三〇年度から四二年度にかけての十三年間に、勉学意欲減退を理由に休学した学生は一人も見当らない。しかし、世界的に大学紛争が勃発した昭和四三年度から四八年度の六年間に実に五二名の学生が休学届書に勉学意欲減退を明記し、休学している」という事態が発生しているのである。

この世代の学生が示す変調が、「大学紛争」に連動していることは想像に難くない。一方で、戦後民主主義によって培養された自由の感覚、「ゆたかな生活」によってはぐ

くまれた開放と充足の感覚、他方で、受験競争に迫りたてられてきた抑圧の経験とかれらの将来をまっとうしている「管理社会」にたいする閉塞と疎外の感覚。このような感覚の拮抗とアイデンティティ(同一性)の分裂は、こんにちの学生にごくふつうにみられるものであるが、それを最初に経験した世代においては、自己存在の危機の意識として醸成されたのである。この意識は、勉学意欲の減退、大学の忌避として内攻的、潜在的に進行すると同時に、大学体制の批判、否定へと外発していったのである。

東大医学部に端を発した国公立大学の「紛争」は、産業界に直接結びついて新たな権力を生む基盤となったとする講座制やそれらにたいして批判的姿勢をとりえなくなったとする教授会にたいする闘争として展開していった。また、日大をはじめとする私学における「紛争」は、マスプロ体制と営利主義的の大学経営にたいする闘争が基調となった。そして、これらの闘争は「大学解体」を共通のスローガンにするものへと急速に展開し、改革ではなく「解体」の運動として「紛争」的性格を強めていったのである。学生のエネルギーが大学を対象として「解体」的に外発したことについては、大学がかれらにとってもっとも具体的な社会であったことや世界的な「学生反乱」の影響があったことを指摘しうるが、それだけでは外在的にすぎるであろう。学生をとらえた自由と抑圧、開放と閉塞、充足と疎外の内的葛藤のありようは、大学が固有のしかたではあるがも

っともよく共有していたといえる。政治権力に対して大学の自治を確保してきた一方、「大企業体制」としての経済権力に対しては迎合したり無力であったりという二面性、学問の自由の標榜と現実遊離的「専門閉塞」への傾斜というディレンマ、高等教育を受ける権利の国民への拡大と「人的資源」の育成と選別の機構化という矛盾がそれである。一言でいって、蓄積されてきた民主主義的価値が急速に発展し浸透してきた産業合理主義によって空洞化されていくという問題である。そして、学生は、自らの世代のアイデンティティ危機を克服しようとするエネルギーを、大学体制のこの基本問題へふりむけたのである。というのも、大学のこの体制的問題がかれらの内的問題性の具体的な鏡像であったからである。

それゆえ、「大学解体」の運動が学生じしんの「自己否定」の論理を起動力として展開していったという点に、両者の関係はもっとも端的にあらわれたのである。すなわち一流大学における「エリート」養成にしる、マスプロ大学における「労働力商品」供給にしる、そのように管理される操作される客体としての自己を全的に「否定」することと、管理し操作する主体としての大学を「解体」することが、教授陣にたいする「自己批判」追及と「大学占拠」自主管理」という活動形態を媒介にして相即的に展開されたのである。そこにおける「ゲバルト」は、安んじて「管理社会」のなかに就職していこうとする自己にたいする自己強制的

決別の証しであり、そうであるがゆえに、自己に對立するものたちへの自己存在を賭けた「ゲバルト」の行使もあつたのである。

この運動は、ほんらい、産業合理主義とそれがもたらす「管理社会」化にたいしての闘いであるべきであつた。「自主管理」や「直接民主主義」はたしかに叫ばれた。が、闘いのホコ先きは主要に「戦後民主主義」にむけられ、その「欺瞞性」「虚妄性」が追及されたのである。近代派リベラルの政治学者たちの受難はそれを象徴するものであつた。すなわち、「啓蒙主義」的な民主主義や「高踏的」なアカデミズムが、戦後日本社会の「管理社会」化と人間疎外の深化を陰蔽し助長してきたのであるから、それらを取り除き社会の問題性を白日のもとにさらしださねばならない、とする論理である。その虚偽性を暴露することによって問題の眞の所在を明らかにする批判精神は貴重なものである。しかし、重要なのは批判のし方である。批判されるべき虚偽性は、戦後民主主義ではなく、「産業合理主義」とその系である「能力主義」「競争主義」「ソフトな管理」「大量消費」などにあるはずであつた。そこに大きな論点のとりちがえがあつたといわなければならぬ。

こうしたとりちがえが生じた原因は何であらうか。「階級闘争」主義をとるセクトの民主主義輕視の影響もあつたであらうが、ここではかれらの「甘え」に言及しておきたい。たとえば、かれらの大学実力占拠「自主管理」はか

れらが否定した「大学の自治」に守られてはじめて可能だつたのであり、「管理社会」の日常性のなかでは通用しないものであつた。たとえば、また、リベラル派を攻撃する一方でタカ派教授や三島由紀夫を称揚するといったことは、ほんらいかれらの内的葛藤をもつともよく理解できる人々を攻撃し、かれらからもつとも遠い人々の信念の「強さ」に屈服することである。これらのなかに「甘え」をみないわけにはいかない。そして、その「甘え」は多分「戦後民主主義」への依存に由来しているといえよう。

民主主義を、その価値の内在化においてではなく、それへの依存において受容したということは、かれらが「めぐまれた」世代であることを意味している。そうだからこそ、かれらを襲う社会的苦難の責任を「戦後民主主義」に帰し、その「欺瞞性」「虚妄性」を攻撃しえたのであろうし、また、一定の心理的葛藤をともなつたにしてもわりあい容易に「自己否定」を行なうことができたのではなからうか。かれらの問題提起に強い衝撃を受けたのは、かえつて「戦後民主主義」を苦惱しつつ内在化してきた、かれらより上の世代の人々であつたともいえるのであるが、大学闘争それじたいは「紛争」的に展開し、荒廃のうちに終熄せざるをえなかつた。戦後の「めぐまれた」世代の不幸がそこに胚胎していたのであり、また、こうしたすがたをとつて戦後日本の民主主義の定着の不十分さが露呈されたのである。

二 シラケからネアカへ

「紛争」の始まる頃から「三無主義」といわれる青少年の意欲減退が増大していったことはすでに指摘したが、「紛争」後の学生たちも虚脱感と無力感にとらわれていき、これらが合して「シラケ世代」と呼ばれるものが形成されていった。

シラケについてある心理学者はつぎのように言っている。

「『しらけ』は、強迫神経症の反対である。伝統や道徳や他人の思いを構わず、それに従おうとしない」、「『しらけ』は現代文化の人間疎外という欠陥の産物であるが、人はしらけることによって、その文化価値から落っこちる。文化価値への参加を拒否する。……彼らは伝統的な価値一切から離れて、本能的感覚的な直接実感だけで生きていく」、「絶望しながらも捜しつけ求めつけけるならば、それはもはやただの絶望でなく、絶望を超えている。『しらけ』ている人は、しらけていることを自分に許している。しらけていてそれだけにとどまることを選んでいる」。

社会の支配的価値にたいする拒否の意識と絶望感、無力感という二面性をもった当時のシラケは、いわば「強いしらけ」であった。ヒッピーという抵抗的な生活スタイルとしてあらわれたり、また、対極に「モーレッツ」といわれた、体制のなかへ突進するエネルギーの噴射がみられたが、こ

れらに「強いしらけ」の反映をみることができるとは、シラケは「しらけにとどまる」ことを内在化させている以上、「強いしらけ」はしだいに「弱いしらけ」へ、すなわち、無活動、無感動、自閉へと進まざるをえない。

このような変化を表現している統計資料をあげてみよう。第一表は、世界青年意識調査（一九七二年と七七年）における「社会に対する満足度」の回答結果である。これからわかることは、世界一ヶ国中「満足度」がきわめて低い（七二年最低、七七年フランスに次いで低い）こと、しかし、この五年間に「不満」である者が減り「満足」している者が増大していることである。第二表は、「社会に対して不満を持ったと仮定したばあいの態度」であるが、「合法的範囲で積極的な行動」が、各国に比べて、七二年には平均的であったものが、七七年にはフリーピンに次いで低くなっている。また、この五年間に「合法的範囲で積極的な行動」と「選挙権の行使」が減り、「社会のことにはかわりをもたない」と「N.A.」が増えていることがわかる。第三表は、「選挙権を行使する以上の積極的な行動をとらない」理由を問うたものであるが、「個人の力では及ばぬところに問題があるから」とするものが、各国と比べてきわだつて高率であること（二位は七二年西ドイツ五三％、七七年西ドイツ四六％）、そして、それがこの五年間にやや減っていることがわかる。

概していえることは、(一)社会に対する「不満足」度がき

第1表 社会に対する満足度

(単位%)

	1972年	1977年	増減
満足している	25.9	35.2	+ 9.3
不満である	73.5	57.4	-16.1

(出所) 『日本の青年—世界青年意識調査(第2回)結果報告書—』総理府編、昭和53年。

第2表 社会に不満を持ったときの態度

(単位%)

	1972年	1977年	増減
場合によっては、暴力などの非合法の手段にも訴える	3.6	3.2	- 0.4
合法的範囲で積極的な行動に訴える	36.6	26.0	-10.6
選挙権を行使する以上の積極的な行動をとらない	54.5	39.3	-15.2
社会のことにはかかわり合いを持たないようにする	4.8	13.4	+ 8.6
N. A.	0.5	18.1	+17.6

(出所) 同上

第3表 選挙権行使以上の積極的な行動をとらない理由

(単位%)

	1972年	1977年	増減
個人の力では及ばぬところに問題があるから	73.0	64.7	- 8.3
社会のことは、それにふさわしい人がやればよいから	8.5	13.2	+ 4.7
自分にとって、他にもっと大切なことがあるから	17.9	15.4	- 2.5
N. A.	0.5	6.7	+ 6.2

(出所) 同上

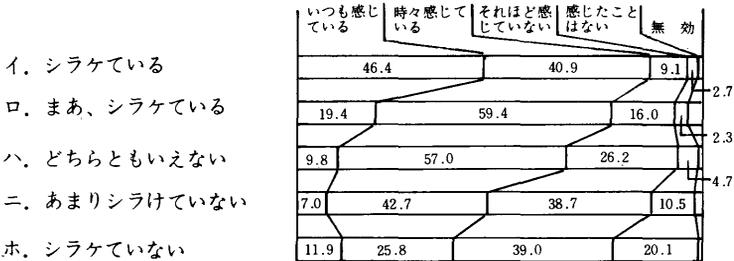
わめて高いこと、(二)そのわりには政治的、社会的に積極的な活動に訴えようとすることが少ないこと、(三)その理由として「個人の力では及ばぬ」とする者、すなわち、疎外感、無力感にとらわれている者が多いこと、(四)この五年間は、七三年の「石油危機」を契機とする「低成長」への転換をふくんでいるわけであるが、社会に対する「満足」度がこの間やや高まっていること、(五)そして、それは「社会のことには、かかわり合いを持たないようにする」という、無活動、無関心の態度の増大によってもたらされたものであると推定できること、である。

「高度成長」から「低成長」へ、「革新の時代」から「保守回帰」へと大きく転換する時代のなかで、「モータ」から「やさしさ」へ、「強いしらせ」から「弱いしらせ」への変化が進行していったのである。

このことをふまえながら、シラケの意識構造をもう少し分析してみよう。私たちが八〇年に実施した学生意識調査によると、「自分自身はシラケているか」との問いに対する回答は、イ、「あたっている」一一％、ロ、「まああたっている」二四％、ハ、「どちらとも言えない」二八％、ニ、「あまりあたっていない」一八％、ホ、「あたっていない」一九％であったが、このシラケ意識度との相関で言えるのはつぎのことである。(一)シラケていると思っっている学生ほど無力感を感じているものが多い(第一図)、(二)また、「現代社会のなかで自分を価値あるものだ」と思わないものが多

第1図 あなたは大学に入ってから、無力感を感じることがありますか。

(単位%)



(出所) 注(3)参照

二七、二二、一六％)、「本を読んだり勉強する」「映画などを見に行く」ものが少ない(同じく一九、二七、三三、三七、四三％)、ことである。すなわち、シラケが、「学

い(図略、イロハ順に四九、五〇、三五、三二、二五％)、(三)「熱中できるものが欲しい」と答えたものが多い(同じく五二、五〇、四八、三七、三二％)、(四)七〇年前後の「学園紛争」について「社会と大学の腐敗をあばき出したという意味で高く評価できる」、「当時学園内にいたらおもしろかったと思う」とするものが多い(イ十ロ四一％、ハ二八％、ニ十ホ二五％)、(五)かれらのじつさいの生活では、シラケていると思っっている学生ほど、「パチンコ、麻雀をする」「ぼんやりしている」ものが多く(同じく三三、三五、

園紛争」に対する親近性を有していること、無力感、無価値感（疎外感）に浸されていること、「熱中できるものが欲しい」としつつ無活動にとどまっていることがわかる。

ところが、これらと少し異なった回答傾向を示すものがある。それは、(六)シラケているかどうか「どちらともいえない」とする学生において、「就職するのは自分の生活の為であって、良い生活のできる仕事につければよい」とするものが多い（同じく三三、三八、四〇、二九、二八％）。また、(七)政党支持において、「自民」「社会」を支持するものが多い（同じく、自民一六、二〇、二二、一六、一六％、社会一六、一八、二四、一六、一六％）、ことである。シラケについて「どちらともいえない」とするものを、いまあえて「自覚のないシラケ」「弱いしらけ」にあるものとするならば、この層は社会や政治に対して現状肯定の傾向をかなりもっている、といえそうである。

あるカウンセラーは、シラケを「アパシー」（「やる気ない」）の系列におく一方、(六)(七)にうかがえるような現状適応の傾向を「潜在的無気力予備群」（「のる」）としてとらえている。

「大学大衆化時代の能力主義的競争原理に支配されていて、とりわけ『疾風怒濤』を経験して無気力になるどころか、『優』の単位を出来るだけ多くかせいで最低四年間でセカセカと卒業して、一流企業に就職し、『バス』に『のり』遅れまい——として、権威への同調的関わりに汲々とする

一群が増えてきた。……これらの諸君は、ふだん来談しないとしても、来談するとなると何度も来談して『お得意さん』になるが、相談では自ら努力して問題にとりくもうとはせず、むしろ、現実の些細なことにも敏感に反応して社会への順応、未来への予測に万全を期そうとコンピュータ代わりに『助言』を求めただけでなく、すべてにおいて著しく依存的である点において容易に類別される。また、かれらはよく語り、無気力と全く無縁にすら見える。だが、相談が進んで、自ら充足する代理的自我の陰で『早期完了』して意識から『排除』（foreclosure）されていた意味づけが問い直されると、『砂の器』の陰に隠れていた疎外感が直ちに顕在化してくる。しかも、『バス』が少しでも遅れたり、自分で努力して『歩か』ねばならず、大人との関わりが少しでも欠けたりすると、とたんに『能力』不足のせいにして気力を低下しやすいため、改めて彼らを『潜在的無気力予備群』⁴といってしまう」と。

そして、この一群につきのような位置づけを与えている。『J.E. Marcia は E・H・エリクソンのいう自我同一性(ego-identity)の達成と拡散の両極間に、第一にコミットへの闘いを試みつつ自己を限定できない猶予期間(moratorium)と、第二に代理的自我で同調して『質流れ』しなから意味づけ撤去で『早期完了』した『小成群』(foreclosure)との両者を位置づけている……資料によれば現在では『私事主義』傾向が支配して前述『小成群』が多数を占

め、自分でも気づかないで『静かな疎外』を深めているのではと思われる⁵⁾。

七八年の阪大保健管理センターの調査によると、七〇年の調査結果に比べて「孤立傾向や抑うつ傾向を表わす項目になると、出現率が激減した。例えば『やる気が出てこない』が四四・五％から一六％に減つたのをはじめ、『何ごとも生き生きと感じられない』『他人が信じられない』『人に会いたくない』『自分が自分でない感じがする』『不眠がちである』などがいずれも一〇—二〇％に落ちるなど大幅な減りようをみせている。これだけを見るなら学生たちは健康的になり、より明るくなったと説明できる。だが、その明るさの裏側には何があるのか。同保健管理センターでは学生の身の上相談を受け付けているが、十年ほど前は人生観や宗教問題などに悩む学生が多く、たじたじとなる難問が持ち出された。それが最近では『どの課外クラブに入ったらいいか』『第二外国語で英語、独語のどちらを選んだらいいか』といったことまで自分で決められない学生が目立つ。就職試験で一回失敗するともうガックリして精神に異常をきたす例も出てきている⁶⁾、と報告されている。

まさに、意味づけ撤去で『早期完了』の『ぼくちやんたいプ』が増えているのである。この三、四年、学生の間には『ネクラ』ということばがはやった。つまり、『根が暗いやツ』という意味のレッテルであり、それは、自我同一性を求めながら回避や自閉にとどまり鬱々と時を過ごすシラ

ケ人間に対する擲揄である。もちろん、そのことばが、早期完了の『小成群』すなわち『ネアカ』人間の大量登場のなかで語られていることは言うまでもない。そして、昨今の就職戦線において大企業の求めているのが、『ネアカ、スポーツ、知識』を備えた人間なのである。『鋼鉄のような外衣』をまとつた今日の『管理社会』に安んじて住めるのは、『陽気なロボット』(ミルズ)を置いてほかにないと言っているのである。

三 現代学生の可能性

現代の学生像のなかにどのような可能性を探りうるのか、むつかしい問題である。ここでは、かれらをとらえている深い疎外が、かれらに大きな飢餓感を抱かせているという視点から少し検討を加えてみよう。

まず、かれらをとらえている疎外の一つに権威からの疎外がある。すでに『権威への同調的関わりに汲々とする一群』が増えてきたことにふれたが、ある政治学者は『現代の保守性』に言及して、『今日の若者たちの『保守化』は『近代』から『伝統』へと回帰しようとするイデオロギー的な『保守化』ではなく、むしろ『伝統⇩近代』という明治以来の日本近代化過程における意識形成の基本軸そのものが溶解したうえでの——ひよわな自我を内実とした——多分に非政治的な私生活中心主義的現状肯定の感覚の表明

である」と言っている。そして、「後者〔甘えの構造〕が日本の社会と文化の共同体的構造の強固な持続を論証しているのに対して、前者〔ナルシズムの時代〕は、『父親なきパターナリズム』と呼ばれるソフトなテクノクラシーの支配を内実とする現代の管理社会下の、原子化と非歴史化と感性化を特徴とする『ひよわな自我』を鮮かに抽出して」いる、としている。

日本人の深層心理における母性の支配、戦前の天皇制的、家父長制的権威の解体と「父親なきパターナリズム」としての管理社会の成熟。このような権威の二重の不在状況のなかにあつて、今日の若者は欲望と「誇大自己」を肥大化させながら、「マスコミの英雄や花形選手、コマーシャルのキャッチフレーズなどには全く無批判に追従してしまふ」ところの「匿名の権威の肯定」に傾斜している。

しかしながら、それだけに、かれらの「人格的権威」「合理的権威」に対する渴望は強いものがあるといえる。それはたとえば、教師——中学であれ高校であれ大学であれ——に対してむけられる渴いた眼差しにうかがうことができる。「サボッてもだいたいじようぶか」「単位は甘いか」などの些小な功利的判断をなймаぜにしながら、あるコピーライターをして「人間としてホンモノかどうか見抜く力はものすごくある」と言わしめる鋭い眼である。「大学紛争」時にみられた知的、道德的権威に対する渴仰は、今日もお形をかえて学園のなかに揺曳している、といえるのかも

しれない。

かれらをとらえている第二の疎外は、事実からの疎外である。自然からの疎隔、遊びと手伝いの場の喪失、マスコミ情報の氾濫、問題に対する解答の一元化、能力と努力の点数への換算など。ほんらい、「歴史のなかに生きていく自覚（歴史的現存在）」と「すべての事象を観念的に知的にとらえようとする知性化傾向」を特質としてもつのが青年であるが、歪んだ人工環境のなかで、事実に対するナイーブな志向は妨げられ、何が自分にとっての現実性であるのかがわからなくなってくるのである。そして、歴史的現存在に対する緊張感の喪失は、理想や普遍的価値をめぐる知的、抽象的思考を鈍らせてしまふ。

そのかわりに、受験競争を通じて膨大な断片的知識を蓄積してきたかれらは、事実と理論の一对一の対応と、その対応の操作可能な編成に強い関心を抱くといつてよい。その発想はきわめて非歴史のであり、イデオロギー的なものに対する過敏な拒否反応を含んでいるが、それはかれらが体制やイデオロギーに強い懐疑をもっているからでもある。しかし、事実と理論の対応をきつちりつけること、そして、そこから出てくる実践的、政策的課題を確定していくことは社会科学にとってきわめて重要なことである。われわれ研究者はえてして理論の整合性や仮説のオリジナリティーに安住してしまうことがないとはいえない。今日の学生の知的関心や発想方法と格闘しながら学問研究を進める

ことは、学問のなかに歴史的現在性を確認していく一つの今日の方途であるといえる。

学生たちを襲っている第三の疎外は、ヒューマニティからの疎外である。今日の青少年は他者を追い抜くことによつて自己実現できないようにしむけられている。追い抜き、追い抜かれ、また、他者を傷つけ、自分も傷つきながら生きてゆくことを余儀なくしている。そういうなかにあつて、日本的ヒューマニティというべきか、かれらは他者や集団から無視され排除されることを非常に恐れている。教師や同級生から「シカトサレル」ことに対する反抗としての非行、また、目立つ子をスケープ・ゴートにしたて、自分たちの集団的連帯を確認しようとする、「いじめ」など。

相互に傷つけあいながら、相互に結びつきあおうとする切ない努力とその破綻がそこにあるのではないだろうか。そして、競争の「一時休戦」場たる大学においてはじめて傷つけあうことから解放された学生たちは、しかしながら、相互に結びつきあうことがすぐにはできないとき、「根が暗い」と揶揄し自嘲しあう。一方、それを上手にやつてのける学生たち、それは「陽気な大学生」である。かれらは「ネアカ」である、というより、「ネアカ」を演じている。かれらは、だから、「小成群」としてほんものの「ネアカ人間」ではない。かれらは、「ネアカ」を演じることによつて、各自その根に宿す「ネクラ」との間(ま)をとつている、間をかせいでいるのである。そして、その間のなかにかれ

らは自分の全感性を投入しようとする。

今日の大学生は、このように、いわば「原罪」としての「ネクラ」をしょいこみながら、「ネアカ」でしかやっていけない実社会を見通している。この「ネクラ」と「ネアカ」の調停しごたい間のなかにかれらは自分の生活を構成していかねばならない。そして、そこにおける緊張と不安を生き抜くには、かれらが切ない努力のなかに磨いてきた鋭敏な感性と、それを底支えしてくれる、内面化すべき人格的、合理的権威と歴史的現在性を認識しうる知性が必要となるであろう。

私が私学R大で担当した三期にわたるゼミ生を想起するとき、それぞれ個性的なしかたでこの努力を試みる学生たちのすがたをみるのである。本稿で引用した学生意識調査を「シラケ人間に捧げるレクイエム」としてまとめたH君は、「ヒーローや全体主義の渴望、新興宗教の隆盛、青少年の非行の増大など……むしろそういう状況の中では、シラケ徹底のなかに抵抗志向の強まるのを期待するほうがまだ救いがある」と書き残して大阪の中学の教師になったN君は、私に「頭でっかち」「公式主義」「ケチ」などと散々悪態をついてその「人間主義」をぶつけ、ともに行った寝屋川調査では文化住宅に住む人々の生活史を探り大部の卒論を書いた。社会学研究会に入っていたFさんは、民間企業に就職したのであるが、その仕事にあき足りず資格をとり、結婚してその転居地で自治体の消費者問題の相談

員の仕事をしている。成績では下位であったがその「ネアカ」ゆえに逆転採用されて新聞社に就職した丁君は、ゼミの運営委員長であり、西洋史研究会で増田四郎の「パウムクーヘン」論に目を輝かせる学生であった。ゼミのときどこにいるかわからない内気なK君は古代の日朝交流史をテーマに卒論にとりくんでいるが、その序文につきぎのように書いている——「以下においてテーマとすることは、言わば日本が『多孔質の社会』として存在する可能性の存否を問いかけることにある。『多孔質』の意味するところは、無数の風穴を持った通気性よき社会のことであり、そしてそういった開かれた社会への可能性を、黎明期以来の日本と朝鮮の関係史の発掘を端初として秤量してみたいのである。……それは、現代日本人の精神構造下に潜む伏流水を掘りあてる作業にも比定されるかもしれない。そしてその水脈に日の目を見させ、その水質を検証、分析することによって、あるいは文明のもたらす高度な疎外状況のただ中にある、あるいは文明のあながちないとはいえないのである」と。

かれらをはじめとするゼミ生を思い浮かべながら、合理的権威——人格的権威とまではいわないが——と新しい知の獲得において大学はかれらにとってやはりかけがえのない場であることを、私は再確認するのである。

(一) 上地安昭「学生の意欲減退」『現代のエスプリ一六八・ス

チューデントアパシー」(昭和五十六年七月)再掲、一八八頁。

(2) 堀淑昭「『しらけ』の人間学」前掲書二〇一—二〇八頁。

(3) 学生意識調査プロジェクトチーム「学生意識調査報告」立命館大学産業社会学会学生総合機関誌「さんしゃ」八〇年度特別号、一三九—一八三頁。

(4) 石井完一郎「大学大衆化時代におけるステューデント・アパシーについて」『現代のエスプリ』前掲書二二—三頁。

(5) 石井完一郎「静かな疎外」前掲書二〇八頁。

(6) 白石純三助教授らによる調査(朝日新聞記事より)。

(7) 山口定「現代の保守性」(朝日新聞、一九八一年三月一日夕刊)。

(8) 小此木啓吾「自己愛人間」朝日出版社、八一年。

(9) 西平直喜「青年期における発達の特徴と教育」『岩波講座・子どもの発達と教育6』七九年、二五頁。

(10) 糸井重里、座談会「若者の保守化とは」(朝日新聞八一年八月二九日朝刊)。

(11) 西平、前掲論文、二二—二頁。

(神戸大学文学部)